

平成 26 年 5 月 15 日現在

機関番号：32663

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2011～2013

課題番号：23520219

研究課題名(和文)文学と音楽の理論的協同にもとづく近現代日本文学の音楽表象に関する分析と検証

研究課題名(英文)An Analysis and an Inspection for the Representation of Music in Modern Japanese Literature based on the Collaboration of Literary Theory and Music Theory

研究代表者

山本 亮介(YAMAMOTO, Ryosuke)

東洋大学・文学部・准教授

研究者番号：00339649

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,100,000円、(間接経費) 930,000円

研究成果の概要(和文)：文学理論と音楽理論を融合することで、文学作品および音楽作品に対する新たな分析方法の創出を試みた。特に両芸術の虚構性に焦点を当てて、双方の理論を接合した。最初に、文学研究における虚構理論の課題を検証した。続いて、音楽作品および音楽評論の虚構性や、音楽聴取におけるパラテキストの機能について、考察を展開した。最後に、文学作品に表象された音楽を対象に、音楽・言語・身体性の関係、音楽作品の固有名とリアリティの関係、などの観点から分析した。

研究成果の概要(英文)：We tried to make a new method of analyzing literature and music by uniting both theories, especially focusing on their fictional elements. We examined a theory of fiction in literary studies, and the fictional element of works and reviews of music, the function of the paratext in listening to music. In conclusion we analyzed representations of music in some literary works from the perspective of the relation of music, language and physical nature, of the relation of a proper noun with music and the reality.

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：文学・日本文学

キーワード：日本近現代文学 文学理論 音楽理論 虚構理論

1. 研究開始当初の背景

文学(言語表現)と音楽(音響表現)の関連性については、両芸術作品の創作場面における影響関係を中心に、それぞれの研究領域で分析・考察がおこなわれてきた。当該領域において、主に実証面での研究はある程度積み重ねられていると言える。他方、現代の文学表現や研究水準から見て、いくつかの問題点が指摘できる。たとえば、これまで文学の作品創造における音楽の影響を考察する際、作家自身の発言に依拠した立論が主となってきた。これに付随して、詩歌・小説の分析が、音楽作品との形式的近似や主観的印象の一致といったレベルにとどまっている。また、文学作品上の音楽表象を受容する読者の問題が、従来の研究では欠落している。作家による音楽体験の言語化と、そうした音楽表象を受容するメカニズムの総合的な考察がなければ、文学と音楽における芸術上の本質的関連は明らかにならないと考えられる。

近現代日本文学を専門とする研究代表者は、主に近現代小説や批評言説について、哲学および文学理論を切り口に考察してきた。一連の研究は、作品・言説分析にもとづく文学理論の再検討を伴うものとなり、現在のところ虚構表現の言語行為論を中心課題としている。そこで着目したのが、作品世界において音楽(体験)を表象する言語行為のあり方である。ここには、言葉と対象の関係、物語内時間と語る行為の関係、虚構言語による芸術性の生成など、現代の虚構理論の論点が集約されている。現代音楽の作曲家であり、音楽理論を専門とする研究分担者との共同研究、および複数の試論をとおして、本研究の具体的方向を定めるに至った。

2. 研究の目的

文学理論と音楽理論の相互検証をとおして、両芸術領域の理論統合および美学思想の横断的展開をおこなう。また、文学・音楽双方の作品分析を提示することで、今後の芸術研究に向けた新たな方法的基盤を打ち出す。具体的には、文学研究と音楽研究の協同理論を開発し、その観点から日本近現代文学における音楽表象の分析・検証をおこなう。特に、文学作品内で音楽体験が言語化される諸相を取り上げ、芸術性の生成・受容場面で、言葉と音の相補性が果たす役割を明らかにする。

文学と音楽における協同理論とその有効性に関しては、文学表象に関する諸理論と音楽学領域における言語論的課題を接合し、新たな研究方法としての協同理論を提示していくこととする。この協同理論を具体的な作品分析に適用し、両領域に共通する芸術上の問題が有効に論じられることを立証する。

音楽の言語表象に関する創作・受容のメカニズムに関しては、音楽(経験)を言語化するプロセス、および言語を媒介とする音楽受容の機構について、作者・読者・批評者・作

曲者・演奏者など多元的な角度から解明する。また特に、フィクションにおける音楽表象の創造と受容が、現実の音楽行為とどのように関わっているかを検討する。

3. 研究の方法

代表者(日本近現代文学)・分担者(音楽学、作曲理論)による各専門領域の資料調査・整理をもとに、研究会を開催する。両芸術領域の理論・歴史・課題に関する相互理解を深めつつ、理論形成と作品分析を協同しておこない論文作成に結びつける。

本研究は、文学研究と音楽研究の二領域を相互参照する学際研究であること(学術的観点)、両研究領域に通用する新しい協同理論の開発をおこなうこと(研究目的との関連性)から、文学研究者と音楽研究者の連携協同が必須となる。

4. 研究成果

(1) 音楽作品と文学表現の関係を考察するための諸理論について、主に検討をおこなった。

音楽体験の記述行為のあり方をとらえるうえで重要な観点として、特に文学における虚構理論へ着目し、その理論展開の現状と課題を明らかにした。まず、近代小説における虚構性の位置づけを確認し、従来の虚構指標論の諸観点を整理、その問題点を確認した。そこから、言語哲学における言語行為論を導入した虚構理論の展開に着目し、言語論的転回以降のラディカルな虚構観との接合を検証した。加えて、虚構言説の受容についても議論を整理し、テキストの虚構性と読書行為の関係に含まれる曖昧さの把握を現在の課題として位置づけた。

さらに、具体的な分析例として、一人称小説と随筆作品を取り上げ、上記に挙げた理論的観点から両ジャンルの相異について考察した。その際、特に音楽体験の記述行為とも深く関わる一人称回想体言説の物語性を論点に掲げた。そして、一人称テキストの物語性に接するとき、作者・語り手・作中人物の関係を軸とする現実/虚構の想定は、極めてファジーに機能しており、そうした虚実の曖昧さと物語行為・受容の結びつきは、近代の文学言説一般に通じることでもある、との結論に至った。

こうした理論考察にもとづき、「モオツァルト」ほか小林秀雄による一連の音楽批評などを対象に、音楽体験に関する表現行為の分析を開始し、特に音楽体験の回想記述における虚構性を軸に、従来の研究の整理と検討を行った。また、文学理論におけるパラテキスト概念を音楽創作および音楽受容の考察に応用し、歴史的な検証をおこなったうえでその問題性を指摘した。

(2) 音楽作品・音楽経験の言語表現に関する諸課題を整理、追究しながら、具体的な小

説作品の分析へと展開した。また、音楽芸術における虚構性について、特に 時間 の観点から理論的な考察をおこなった。

予備的考察として、文学上の一般的課題における音楽芸術の位置づけをおこない、語りえぬもの(言語表現の不可能性)への志向を要諦として、両者の関係を追究することの意義を打ち出した。加えて、小説や漫画などの虚構作品に描かれた音楽(演奏)表現が、なぜ読者に受容可能であるのかについても、問題を敷衍した。

ここから、言語理論上の音楽事象に対する位置づけを視野に入れつつ、特に演奏者の音楽(演奏)経験および聴取者の音楽(聴取)経験と、それぞれの経験をめぐる語り(言語による表象=再現)の問題に焦点を当てて考察を深めた。そのうえで、具体的な作品として奥泉光『シューマンの指』を取り上げ、音楽経験の言語表現を課題とする小説作品が、メタミステリの形式をとることの意味を検討した。ロラン・バルトによる音楽論等を参照しながら、音楽における身体性の観点から作品解釈を展開し、メタミステリという小説形態そのものが、言葉で語ることでできない音楽の身体性の 隠喩 となっていることを示した。

『シューマンの指』作品論の結論は以下のとおりである。意味を義務付けられた「作家」が、「小説」でなく「小説的なもの」において、音楽=身体を語る。ここで求められるのはいわゆる詩的表現ではなく、あくまで小説形態をとった実験の試みであるはずだ。その意味で、一人称回想体のメタミステリ小説『シューマンの指』は、音楽=身体を語る「隠喩」形式の模索であったと考えられる。それは、演奏者の語りえぬ音楽=身体経験を、「テキストに含蓄されたもの」の状態のまま表現することを目指す。「お話」となった小説が抑圧している「小説的なもの」を、再び小説表現として示そうとする、逆説的な努力の結果と言えるかもしれない。

合わせて、物理的時間と音楽的時間の関係、差異について諸説を踏まえて考察し、(現実世界における)聴取者の音楽経験が、一般的な物語受容などと同じように、フィクションの構成原理に即したものであることを示した。

(3) 理論的分析の対象として近年の村上春樹作品を取り上げた。そこではクラシック作品の特定の音盤が示されることで、虚構世界への直接的な接触の仮想が具体化されている。こうした点について、文学と音楽を「観念的内在性」・「物理的顕現」の二様態をとる「他筆的」な芸術とみなす、ジェラルド・ジュネットの議論などと合わせて検討した。

まず前提となるのが、虚構世界で主観的かつ客観的事象として存在する音楽と、実際の世界に「他筆的」芸術として在る音楽との「同一性」である。加えて、物理的時空間に過ぎ

去っていく音響として顕現するほかない音楽作品が、小説世界ではあたかも全体性、統一性を具現しているかに見える。こうした意味で、「他筆的」芸術である文学作品と音楽作品は、それぞれに内在する観念性を相互補完的に機能させていると言える。

ここからさらに、音楽作品の「個体」性が問題となるが、レコード普及以後のクラシック音楽における「個体」の捉え方は、観念的存在である「作品」と、個別の演奏の聴取経験に存する「サウンド」(細川周平『レコードの美学』)とのいずれに重点を置くかで異なる。村上春樹作品における、特定の音楽作品と実在する音盤という二層の固有名は、音楽の「個体」性をめぐる二様の観点に対応しているとも考えられる。また、作品で語られる二種の音盤の存在も、小説世界の一部となって顕現する音楽作品の質的な同一性と、「今・ここ」に生じる「サウンド」の聴取経験を折衷する働きを持つ。以上の考察を通して、音楽描写を含む小説世界が成立する際に、文学作品と音楽作品に共通する観念性、虚構性が果たしている機能の一端を明らかにすることができた。

『1Q84』・『色彩をもたない多崎つくと、彼の巡礼の年』における音楽表象の分析の結論は以下のとおりである。言語テキストとして在る小説世界のうちに、「観念的オブジェ」たる音楽作品が存在「顕現」すること。また、それが架空の(言語表象としてのみ在る)音楽ではなく、実際の世界で固有名によって指示されている対象であること。このとき、読み手である私たちは、端的にヤナーチェクの『シンフォニエッタ』、リストの『巡礼の年』が、小説世界(ときには登場人物の頭の中)に流れているものとする。さらに、実在する演奏音盤=固有名による指示が小説世界の音楽作品に付加されることで、音楽の同一性を通じてなされる小説世界と読書経験の同一視が、より強度を増すはずだ。ここでは、二種の演奏音盤=固有名の存在も、小説世界の「観念的オブジェ」の一部となって「顕現」する音楽作品の質的な同一性と、「今・ここ」に生じる「サウンド」の経験を、妥協させるものとなる。取り上げた小説の登場人物たちは、それぞれの形で、「作品」概念とレコード聴取を上手に組み合わせながら、その音楽が持つ意味を表現していく。同じ音楽を聴いて小説世界に直接触れようとする読み手は、「作品」全体として「顕現」する小説内音楽の観念性に寄りかかりつつ、実際のところ、断片的な言語表象をガイドに、スピーカーから流れる音を「サウンド」として確認しているのだ。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計6件)

山本亮介、小説世界の音楽をめぐる一考察 村上春樹を題材に、文学論藻、査読無、

第 88 号、2014、pp.109-129

山本亮介、奥泉光『シューマンの指』を
読む 音楽の「隠喩」としてのメタミステリ
小説、文学論藻、査読無、第 87 号、2013、
pp.33-53

小野貴史、音楽、あるいは虚構としての
時間、信州大学教育学部研究論集、査読有、
第 6 号、2013、pp.129-142

山本亮介、虚構世界のノで音楽を聴くこ
と、日本文学文化、査読無、第 12 号、2012、
p.90

山本亮介、虚構理論から考える一人称小
説と随筆の偏差 中学校国語教材をめぐっ
て、信州大学教育学部研究論集、査読有、
第 5 号、2012、pp.55-67

小野貴史、音楽におけるパラテキスト性、
信州大学教育学部研究論集、査読有、第 5 号、
2012、pp.109-122

〔その他〕

ホームページ等

「音楽音響芸術研究会」ホームページ

<http://becarre.blog.fc2.com/>

6. 研究組織

(1) 研究代表者

山本 亮介 (YAMAMOTO, Ryosuke)

東洋大学・文学部・准教授

研究者番号：00339649

(2) 研究分担者

小野 貴史 (ONO, Takashi)

信州大学・教育学部・准教授

研究者番号：10362089